様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　５日現在

機関番号：16301
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５２０４４
研究課題名（和文）　「役割語」の視点を導入した写生文・「写生」の日本語学的新研究

研究課題名（英文）　Linguistic analysis of “*shasei*” and *shasei* texts from the perspective of *yakuwari-go*(“role” language)

研究代表者
佐藤　栄作（SATO　EISAKU）
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：80211275

研究成果の概要（和文）：日本語研究の最新の成果である「役割語」の視点を導入して、「写生」・写生文を見直した。俳句実作者と俳句評論家を中心に、近代文学研究のテーマとして議論される「写生」について、日本語研究も加わって論じる場を立ち上げた。まず、「写生」とは固定観念から主体を解放することを前提とするから、その実践である写生文は「役割語」とはなじまないことが確認できた。しかし、写生文の中の方言は「役割語」ではないとか、写生文の方言だけは資料として第一級だとはいえない。写生文においても、使用された方言の資料価値は、作品個々の問題であるという結論に至った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to analyze *shasei* texts from the perspective of *yakuwari-go* (“role” language). Writers of *shasei* texts try to liberate expressions from their fixed connotations and images. *Yakuwari-go* are words that are used to imply the identity of their users (e.g. gender, age, and birthplace). Thus, *yakuwari-go*, which can reinforce fixed images, should not be used in *shasei* texts, but in fact, they are. Indeed, dialect words used in *shasei* texts sometimes play the role of *yakuwari-go*. They should be analyzed in the context of each *shasei* text, just like regional expressions in other types of literary works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	600,000	0	600,000
2010 年度	300,000	0	300,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	120,000	1,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語学・役割語・写生文・写生

１．研究開始当初の背景
（１）「写生」について

正岡子規が提唱した「写生」については、従来は、俳句・短歌の実作者・評論家によっ

て取り上げられることがほとんどであり、それゆえ、「写生」の定義は、時代やジャンル、さらに結社・個人によって異なるといわれ、近代文学研究においては、扱いにくい課題であった。

（２）写生文について
　写生文については、いわゆる明治の「言文一致」体の一つとして、近代日本語の文体史の中で検討されてきたが、（１）で指摘したように、その依って立つ「写生」の理念の解明が極めて困難であって十分でないため、写生文研究も十全なものであったとは言いがたい。

（３）文学作品の中の方言
　本研究の研究代表者は、文学作品の中の方言の資料価値について強い関心を持っていた。特に、夏目漱石の『坊っちやん』自筆原稿に見られる高浜虚子の書き入れ部分が、より自然な方言であるように見えることから、（虚子は「写生」・写生文の実践者であるから）、写生文の中の方言は、他の文学作品で使用された方言よりも、資料価値が高いことになるのではと考えた。

（４）「役割語」研究
　ちょうど、大阪大学の金水敏氏が提唱する「役割語」研究に触れ、本研究の研究代表者も、文学作品の中の方言は原則として「役割語」であると考えるようになった。しかし、依然として、写生文の中の方言も「役割語」なのか、それとも写生文に限ってはそうではないのかという問題意識が消えることはなかった。このことが本研究を始める動機となった。

２．研究の目的
　文学作品の中の方言が、あるキャラクターを生み出すための「役割語」であるとしても、写生文の中の方言だけは例外といえるかもしれない。しかし、それは、写生文が「ありのまま」を写した文であるということを前提としている。果たして写生文は「ありのまま」を写した文なのか。そもそも「ありのまま」を写した文など存在するのか。
　ここを明らかにするには、写生文を写生文たらしめるもの、すなわち「写生」とは何かを解明しなければならない。よって、本研究の目的は、
（１）「写生」理念の解明
（２）「写生」の実践としての写生文の解明
（３）「役割語」研究の成果の理解
（４）「役割語」の視点からの写生文の見直し
（５）写生文の中の方言の位置付けと資料価値の解明

３．研究の方法
（１）「写生」研究、「役割語」研究の第一人者から専門的知見を得、実作者,近代文学研究者,日本語研究者が垣根を越えて議論する場として、「愛媛大学写生文研究会」を立ち上げる。

（２）明治（子規）以来の「写生」の用例、「写生」について言及した記述、写生文の文例を収録した解説書など、基本資料を収集し、それによって、「写生」の成立と展開、継承、写生文の実態をとらえる。

（３）進展する「役割語」の研究を理解し、その研究成果を本研究に取り入れられるようにする。

（４）「愛媛大学写生文研究会」を開催し、専門家の講演を聞き、研究についての助言を得る。以下のような専門家による講演と助言を計画し実施する。その際、参加者が一つの分野・領域に偏らないようにし、異なる分野・領域の専門家が同席し、一般市民も参加・交流できる会であることを本研究会の開催理念とする。
・「写生」提唱者である子規研究者
・「役割語」研究の提唱者である日本語研究者
・子規以降の「写生」について詳しい専門家

（５）以上の活動を実施し、そこで得た知見を総合して、自らの考えをまとめる。研究活動とその成果を報告・発表する。

４．研究成果
（１）「愛媛大学写生文研究会」の活動
　「愛媛大学写生文研究会」を立ち上げ、５回開催したことは、その内容とともに、「写生」の提唱者正岡子規の出身地松山からの発信という点からも、科学研究費補助金をいただいた本研究の成果であると考える。
①第１回　近代文学研究、俳諧研究からの本研究の進め方についての助言。
②第２回　子規研究者による「子規の「写生」について」の講演と研究への助言。参加者によるディスカッションも行った。この研究会の際には、子規記念博物館見学も合わせて実施した。
③第３回　「役割語」提唱者による「写生文」についての講演と研究への助言。この講演は、松山坊っちゃん会との共同開催とし、松山坊っちゃん会会員、また一般市民にも公開した。

この講演の内容は、「松山坊っちゃん会会報」11 号に掲載された（佐藤 2012「研究成果報告書」に転載）。
④第４回　俳句評論家による「写生」についての講演と討論会。参加者は、日本語研究者、近代文学研究者、俳諧研究者、俳人、歌人。参加者によるディスカッションも行った。「写生」・写生文を多様な視点から総合的に論じることができた。
⑤第５回　第４回を受けて、「「写生」―俳句の場合―」をテーマとしたシンポジウム。「写生」に興味関心を持つ俳人などが「写生」について討論した。ここでの講演とシンポジウムの概要は、ウェブマガジン「週刊俳句」にアップされた（佐藤 2012「研究成果報告書」にも）。第５回は、講師の都合で、京都市での開催となった。それによって、関西在住の方々４０人の参加があり、ウェブマガジンへのアップと合わせ、愛媛大学写生文研究会の名が広く知られることとなった。

（２）「写生」理念の確認

俳句に限っても、子規の「写生」から現代の「写生論」に至るまで、「写生」については様々な理解・解釈・把握が存在するが、今回の研究によって、子規の提唱した「写生」とは、ただ「ありのまま」を写すことではなく、既成の観念や固定化した主観から主体を解放して、自然や人事を見ることであるということが確認できた。

子規は、文章は面白くなければならないとし、自然そのものの方が、人間が頭で考えることよりも、バラエティ豊かで、面白いと考えた。人間が考えるストーリーより、自然の動きの方が驚嘆・感動に満ちていると考え、そこから、文学は、作者の枠、固定観念で作るのではなく、自然と写し取るべきである、との論に進んだ。これが子規の「写生」である。これは同時に、自然（人事も含め）の、どこを切り取るか写し取るのかというところに、強烈な作者の個性「主観」が存在することになる。

子規の「写生」に基づく作品に重要なことは、「むだなことばをカットする」ということになる。「写生」にふさわしくないものを具体的に挙げると、①主観的なことば、作者の「想像（子規のいう「理想」）、②作者による修飾、わざとらしい技巧、③難しい漢語、専門用語、④だらだらとした「冗長」な文章、ということになる。

これは、第４回研究会で講演と助言をいただいた関悦史氏が、本研究のために執筆してくださった「写生について」による（佐藤 2012「研究成果報告書」所収）。

この理解に至る前提として、第２回研究会での青木亮人氏の子規の「写生」についての講演・指導助言があった。関氏は「写生」を、「小さく固定化した主観から主体を解放し、大きな客観世界と有機的な関係をとりむすぶ現場」と規定したが、この「現場」という把握の鋭さと確かさは、第５回研究会での竹中宏氏の講演とその後のシンポジウムで確認できたと考える。第５回の研究会については、佐藤 2012「研究成果報告書」参照。

（３）「役割語」と「写生文」との関係

「写生文」中の方言の位置付けと資料価値については、第２回研究会での金水敏氏の講演・助言を受け、検討した。今回まとめた佐藤 2012「研究成果報告書」収載の関悦史氏の「写生について」は、この点についても本研究の現在の到達点である。

（２）でまとめたように、「写生」は固定観念の排除を目指すから、「役割語」とは相容れないものということになる。佐藤 2012「研究成果報告書」の関氏の「写生について」によれば、「無用なルビや説明を入れなくても読者にそのまま伝わるよう、発語された意味内容を重視してじっさいの発音の方は適宜補正するのが文章表現の生理」であるとし、方言を用いることは、「「わかりきったことは省く」という写生文のプリミティブな指針に反するどころか、（中略）写生文としての統合性を破戒するノイズとなりかねない」とする。また「標準的でない発語が容易に類型化と結びつくということは、書き手からすれば「臭い演出」だということでもある。写生という脱陳腐化の方法が類型化した表現へ向かうのはジャンルにとっての自殺行為となる」とも述べる。「役割語」とは、まさに人々が準備している「類型化」された人物像を描き出すことばであるから、「写生」・写生文と「役割語」とは相容れないということになる。

そうすると、それでもなお写生文中に用いられている方言があるとすれば、それは「役割語」ではないことになるのか、問題はこの点に絞られる。「その方言自体が写生文の題材として書き手の興趣をそそる」場合は特別だといえるかもしれない。しかし、その場合においても、先の「補正」は免れない。

つまり、「写生」理念に基づいていることをもって、写生文中で使用された方言は「ありのまま」であり、その資料価値は高いと考えることはできない。一方、「写生」と「役割語」とは本来相容れないものであるが、写生文中にも方言は用いられている。それらは、いったい何なのか。それらは二つに分けられるだろう。一つは、方言自体を写生文の題材にした特別の場合。もう一つは、「写生」理念の緩み、誤解等によって用いられた場合。いずれにしても、「補正」を経たものであり、後者は「役割語」としての働きを持ち、写生文以外のジャンルにおける方言と何ら変わるところはないといわざるを得ない。つまり、

写生文中の方言の資料価値は、一般の文学作品の場合とほぼ同様に考えるべきであり、個々の作品のレベルで、分析して判断せざるを得ないということになる。この点、本研究の当初の予想からして、残念な結果ともいえるが、漠然としていたものがはっきりとしてきた。

（４）反省と今後の展望

①「写生」と言文一致

研究の内容・性格上、日本語研究の学会での研究発表になじまず、研究期間内に学会での成果発表ができなかった。論文についても、研究代表者の執筆した学術論文はまだまとまっていない。今回の研究会での成果を、すでに多くの先学によって進められている明治の言文一致についての日本語研究の成果と結び付け、日本語学の研究論文としてまとめなければならないと考えている。

②方言研究、「役割語」研究と「写生」

明治の方言の位置付けについては、現代のような標準語・共通語との二項対立的な把握では不十分であろう。関氏の「写生について」に不十分な点があるとすれば、この点であろう。さらに研究を深めていきたい。

③「写生」そのものの研究

本研究会の第５回研究会の内容は、ウェブマガジン「週刊俳句」にアップされたが、かなりの反響があった。子規の「写生」、虚子の「写生」、茂吉の「写生」、それらが相違し、自らの俳句結社・短歌結社の「写生」もまた、それらと同一ではない、そういった経験あるいは現実が気になる実作者は多い。写生文という文学ジャンルは確立せず、文体としても、文体の呼称としても存在しないが、「写生」についての興味・関心が極めて高いことを実感できた。

「写生」を実作者、評論家だけのテーマとせず、これからも日本語研究者が発言し、分野・領域横断的に、様々な人々が一堂に会して議論を戦わせ、深めていくことが必要だと考える。

④俳都松山の役割

その際、「写生」提唱者子規の故郷である松山は、「写生」研究の拠点としてふさわしい地であり、その成果を発信する責任を負うべきところだと考える。研究期間を終わっても、「愛媛大学写生文研究会」を可能なかぎり継続していきたい。

５．主な発表論文等

〔その他〕

① 佐藤栄作、「役割語」の視点を導入した写生文・「写生」の日本語学的新研究―研究成果報告書―、2012、49

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　栄作（SATO　EISAKU）
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：80211275